

春日井市外国語指導助手活用方針

期間:令和9年4月1日～令和12年3月31日

目次

- 1 はじめに
- 2 ALTの活用を通じて、めざす子どもの姿
- 3 春日井市における外国語教育の課題
- 4 ALTを活用した具体的アプローチ
- 5 ALT配置計画
- 6 ALTと英語担当教員の連携
- 7 ALT活用計画構想図

※ 目次及び本文において、「外国語指導助手」は「ALT」と表記しています。

1 はじめに

現行の学習指導要領の外国語科等においては、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による言語活動を通じて、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが求められている。また、近年のGIGAスクール構想の進展や次期学習指導要領を見据えた議論においては、児童生徒が主体的に対話を行い、思考力・判断力・表現力等を高める学びの充実が重視されている。こうした中、ALTの役割も、単に「標準的な英語音声や生きた外国語に触れる機会の提供」にとどまらず、多様な文化背景に触れながら即興的に思いや考えを伝え合う対話のパートナーや、主体的・協働的な学びを促す伴走者としての重要性が増している。

春日井市においては、外国語教育の充実のため、平成10年度からALTを小中学校へ配置し、児童生徒が外国語や異文化に親しむ機会を確保してきた。この蓄積を踏まえつつ、ICT等のデジタルツールとの効果的な連携を図り、児童生徒の「伝えたい」という意欲と確かなコミュニケーション能力をより一層伸ばすため、これからの時代に即した活用方針を策定することとした。

2 ALTの活用を通じて、めざす子どもの姿

① 「外国語の働きや背景にある文化を理解し、実践的に活用できる子」 (知識及び技能)

外国語教育においては、児童生徒の柔軟な適応力を生かし、言語の働きやその背景にある多様な文化への理解を深めることが求められます。その際、単に知識として記憶するのではなく、実際のやり取り(体験)を通して理解を深めることが重要であり、ALTとの対話は、生の音声や文化的な文脈に触れる絶好の機会です。

また、外国語の音声・表現や文化の特徴に気づくことは、一方で日本語や自国の文化を客観的に見つめ直し、深く理解することにもつながります。こうした言語や文化に対する多角的な理解は、これからのグローバル社会を生きる子どもたちにとって、コミュニケーションを支える確かな「知識及び技能」の基盤となります。

② 「相手への配慮や状況を考慮し、自分の考えを整理しながら英語で気持ちや意見を伝え合える子」(思考力、判断力、表現力等)

外国語でコミュニケーションを図る際には、単に知識を思い出すだけでなく、相手の発話に耳を傾けてその意図や思いを捉え、自分の持っている言語や情報を最大限に活用して思いを構築する柔軟な思考が求められます。

また、多様な背景を持つ相手とやり取りする中では、相手の文化や立場に配慮しながら、場面や状況に応じて適切な表現を選択する判断力も大切になります。

ALTとの生きた英語のやり取りを通じて、コミュニケーションの目的や状況に応じた情報を整理し、自分の気持ちや考えを即興的かつ適切に表現し合える力を育んでいきます。

③ 「英語を活用し、多様な人々との対話を主体的に楽しもうとする子」
(学びに向かう力、人間性等)

外国語教育における児童生徒の主体性や積極性は、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を培い、機能させるための重要な原動力です。

ここでめざす姿は、単に授業内にとどまらず、学校外や将来の社会生活においても、生涯にわたって多様な背景を持つ人々と主体的に関わり続けようとする態度です。

ALTとの対話を通じた「伝わった喜び」や「間違いを気にせずコミュニケーションができた体験」は、英語学習への意欲を高めるだけでなく、他者への関心を深め、進んで心を開き関わろうとするしなやかな心(人間性)を育みます。

3 春日井市における外国語教育の課題

課題(1) 多くの担任が英語の授業に自信を持てておらず、指導体制の強化が急務であること。

現在、小学校教員の多くは大学の教職課程で英語指導法を学んでおらず(※文科省は2019年度から単位取得を義務化)、これまで授業時間数も少なかったため、経験豊富な教員が不足している。今後、経験の蓄積や指導法を学んだ教員の増加が期待されるものの、その解消には時間がかかる。このため、教員個人の経験不足を補い、全てのクラスで質の高い授業を安定して提供するため

の専門的な指導体制が十分に構築できていないことが課題である。今後は早期から英語が得意な教員が多くをクラスを担当するなど、専門的で魅力的な授業を行っていく仕組みづくりが求められる。

課題(2) ALTと効果的なチーム・ティーチング(TT)を行うための指導力・マネジメント力が担任に不足していること。

ALTは指導助手であり、原則として担任(または英語専科教員)とのTTで授業を進める必要がある。しかし、英語に苦手意識を持つ教員が多い現状では、ALTと十分なコミュニケーションを図りながら協働して授業を進めることが難しい状況にある。本来であれば、担任が授業全体をマネジメントし、児童の様子を見ながらALTを意図的に活用することで学習効果が高まるが、こうしたTTのスキルやノウハウが十分に共有・蓄積されていないことが課題である。このため、今後は効果的なTTの実施に向けた実践的な研修等を行う必要がある。

課題(3) 授業への過度な依存によるALTの多忙化と、授業外におけるコミュニケーション機会が不足していること。

現状、ALTの業務は授業の占める割合が非常に大きく、配置時間を超えてTTを実施している学校も多い。しかし、無理に授業コマ数を増やすと、十分な事前の打ち合わせや準備の時間が確保できず、結果として効率的かつ質の高い授業の妨げとなっている。また、授業の時間内だけに終始することで、子どもたちが授業で身につけた英語表現を実践的に使う「授業外の交流の機会」が十分に活かされていない。ALTを授業のコマ数だけで消費するのではなく、学校生活全体の中で「真のコミュニケーションを図るアウトプットの機会」として効果的に活用する仕組みが不足していることが課題である。今後は、授業外の触れ合いも含めた総合的なALTの活用計画が求められる。

【課題に対して取り組むべき方策】

- (1) 小学校においては英語専科教員の配置や教科担任制の導入を推進し、英語が得意な教員を配置するとともに、英語が不得意な教員へのALTによるサポートやTTにより、授業の質の向上を図る。
- (2) 市教育委員会主導の全体研修や、各学校での校内研修、オンライン研修にALTを活用し、効果的な授業づくりについて研修する機会を増やす。

- (3) ALTの業務内容、活用例を周知徹底し、授業以外での活用を進めるとともに、市主催の事業など、学校外で子どもが関わる事業へ積極的に活用していく。

4 ALTを活用した具体的アプローチ

取組① 授業等における取組

【具体的取組例】

- (1) 担任や英語専科教員等とのTTによる効果的な授業
 - ・ 担任がT1として授業をマネジメントし、ALTがT2としてゲームやアクティビティの進行を行うことで、ネイティブの音声を多く聞くことができる。
 - ・ ALTの態度や表現を見て聞いて感じることで、英語の音声や表現に慣れ親しむことができる。
- (2) ALTによるインタビュー活動やパフォーマンステスト、課題のチェック
 - ・ ALTと実施することで児童生徒の興味や関心が高まり、高い学習効果が望める。
 - ・ これらの活動を動画に記録することで、評価に役立てることができる。

取組② ICTを活用した取組

【具体的取組例】

- (1) オンライン授業動画の作成及び配信
 - ・ ALTと英語専科教員で授業動画を作成し、いつでも家庭で学習できるようにする。
 - ・ ALTが作成した学習動画を配信し、授業や家庭学習で利用する。
- (2) オンライン英会話交流活動
 - ・ ICT端末を活用し、学校の教室と遠隔地(他国の学校やALTの母国等)をつないだオンラインによる英語交流活動に活用する。
 - ・ 教室にいながら生きた英語に触れる機会やリアルタイムのコミュニケーションを体験することで、言語活動への意欲を高めるきっかけとする。
- (3) オンラインでの実践的な英語学習及びALTとの交流活動
 - ・ 少人数の児童生徒に対してオンラインでALTが対応するレッスン形式で、実践的な英語学習を実施する。

- ・ 複数のALTとの交流活動を実施し、より主体的なコミュニケーションの機会と児童生徒一人ひとりが英語を発信する(話す)時間を提供する。

取組③ 学校生活や行事等における取組

【具体的取組例】

(1) 給食、掃除、休み時間での児童生徒との交流

- ・ 学習で身につけた表現を活用する良い機会として積極的に活用する。
- ・ ALTと一緒に活動することで、ALTをより身近に感じるとともに、異文化を体感し、今後の外国語の授業に積極的に参加しようとするきっかけになる。

(2) 特別活動やクラブ活動での児童生徒との交流

- ・ 学習で身につけた表現を活用する良い機会として積極的に活用する。
- ・ ALTと一緒に活動することで、ALTをより身近に感じるとともに、異文化を体感し、今後の外国語の授業に積極的に参加しようとするきっかけになる。

(3) スピーチコンテストに向けた指導

- ・ 中学校英語スピーチコンテスト参加者への作文指導、スピーチ指導に活用する。
- ・ 個別の指導により、参加者のパフォーマンスの向上が期待できる。

取組④ 地域での交流や学習活動等における取組

【具体的取組例】

(1) イングリッシュ・キャンプや体験型イベントの実施

- ・ 長期休業中等に開催される英語体験キャンプや、異文化理解を目的とした体験型イベントにALTを派遣・参画させ、一緒に活動することで、生きた英語に触れ、異文化を体感する機会となる。
- ・ ALTの母国の文化紹介やALTが企画したプログラム(ゲーム、ウォークラリー等)を実施することで、児童生徒にとって魅力的で主体的な学びの機会となる。

5 ALT配置計画

小学校38校、中学校16校を13グループに分け、各グループにALT1名を配置する。(合計13名)

学年	ALT配置時間 ／年間授業時間	位置づけ	取組
小学校 1・2年生	5時間	国際理解を目的とした英語活動	・低学年レッスンプランによる活動、学校独自の英語活動 ・遊びや絵本の読み聞かせ
小学校 3・4年生	15時間 ／35時間	『Let's Try!』を活用した外国語活動	・担任とのTT ・インタビューや発表の相手
小学校 5・6年生	30時間 (※15時間) ／70時間	教科書を中心とした授業	・担任や英語担当教員とのTT ・インタビューや発表の相手
中学校 1～3年生	7時間 ／140時間	生徒のアウトプットの機会	・教科担任とのTT ・インタビューや発表、パフォーマンステストの相手

※英語専科教員が高学年を指導する学校

【配置計画の考え方】

- ・ 小学校1・2年生は、英語の活動が授業数に含まれないので、年間5時間程度(学期に1・2回)ALTとふれあい、外国語の雰囲気を感じさせる機会とする。
- ・ 小学校3～6年生は、外国語活動(35時間)外国語科(70時間)のうち、およそ半分の時間を担任とALTとのTTで指導できるようにする。各UNIT(3・4年生4時間完了、5・6年生8時間完了)の前半部分は、新しい語句や表現の導入が多いので、そこでALTを活用できるとよい。
- ・ 中学校は、日頃の授業で習得した表現を、活用する機会として、年間7時間程度(学期に2・3回)とする。ALTとのインタビューやパフォーマンスを録画・録音すれば、評価をすることもできる。

6 ALTと英語担当教員の連携

【英語担当教員の種類】

① 教科担当教員(校内配置)

小学校の教科担当制における英語科担当。主に英語教育推進リーダー、中学校英語免許を持つ教員等(英語の免許はないが、英語が好きで指導に自信がある教員を含む。)が担う。ALTの指導計画や活用計画、連絡調整、授業の打ち合わせ、研修等も行う。

② 英語専科教員(県加配教員)

教員免許あるいは特別免許取得者かつ一定の英語力を有するもの(要件:

①中学校又は高等学校英語の免許状を有する者②2年以上の外国語指導助手(ALT)の経験者③CEFR B2相当以上の英語力を有する者④海外大学又は青年海外協力隊若しくは在外教育施設等で、2年以上の英語を使用した海外留学・勤務経験のある者)。複数校兼務あり(学級担任にはならない。)

③ 英語専科教員(市T1講師)

市の教科指導講師(会計年度任用職員)。任用条件は県の規準に準ずる。ただし、英語力の要件については、小学校での指導経験や民間での経験、J-SHINE等の民間の資格を有する者等も含む。複数校兼務あり(学級担任にはならない。)

【ALTとのTT】

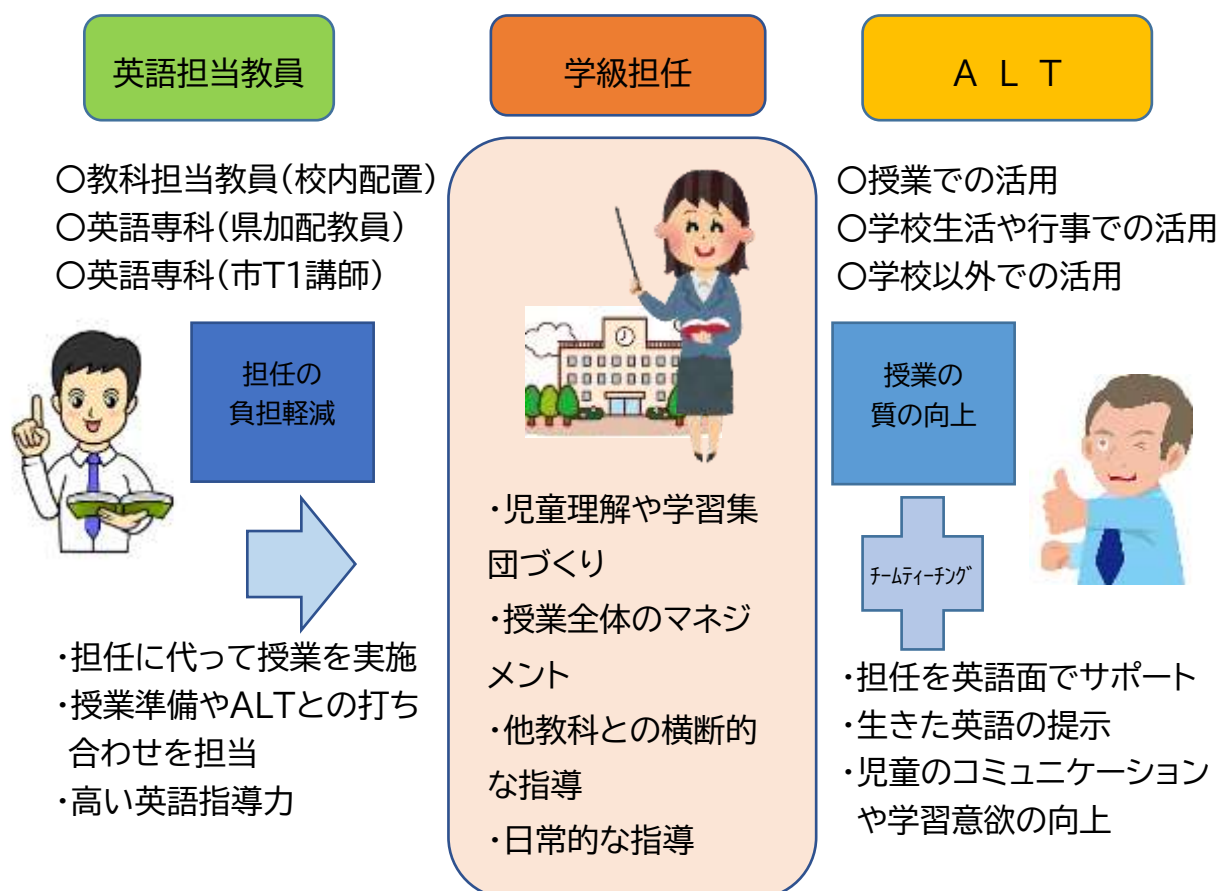
英語担当教員による授業においても、教育的効果の観点からALTとのTTを行う。

ただし、英語専科教員については、学級担任が行う場合の1/2の時間数とする。

<ALT時間数>

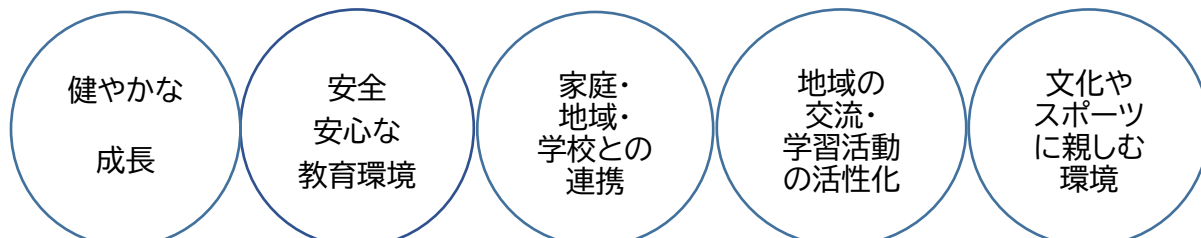
	学級担任	教科担当教員	英語専科教員
3・4年生	15／35 時間		
5・6年生	30／70 時間	30／70時間	15／70時間

【小学校における外国語教育の指導体制について(イメージ)】



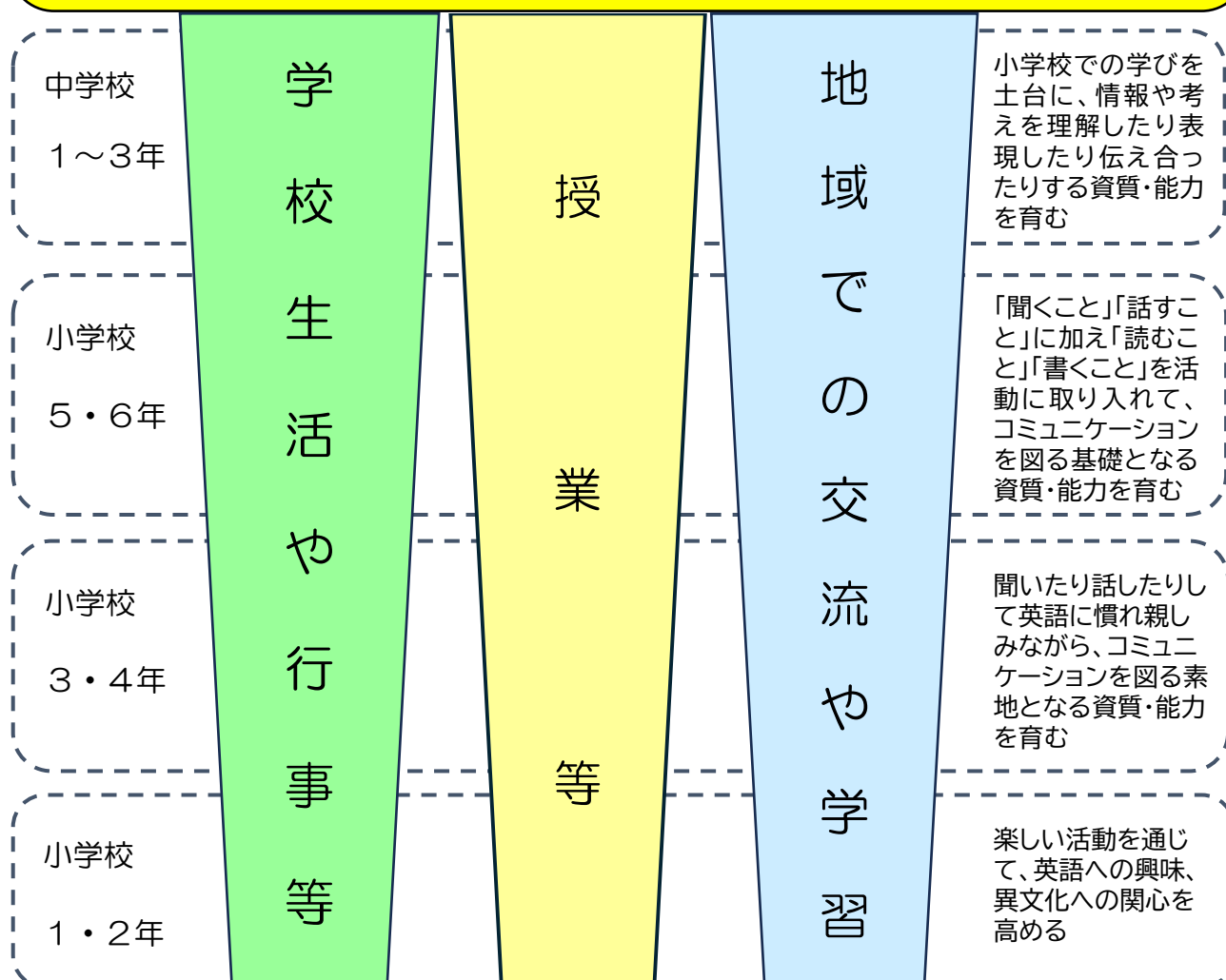
7 ALT活用計画構想図

基本理念「学びが楽しい、学んで楽しい」



めざす子どもの姿

- 外国語の働きや背景にある文化を理解し、実践的に活用できる子
- 相手や状況に配慮し、自分の考えを整理しながら英語で気持ちや意見を伝え合える子
- 英語を活用し、多様な人々との対話を主体的に楽しもうとする子



ALT の継続的な市内全校配置と効果的な活用